

異文化間コミュニケーションとメンタライジング —異文化適応支援とストレス反応の視点から— Intercultural Communication and Mentalization: From the Viewpoint of Intercultural Adaptation Support and Stress Response

栗田 七重 KURITA, Nanae

●国際基督教大学教育研究所, 法政大学市ヶ谷学生相談室
Institute for Educational Research and Service, International Christian University / Ichigaya Student Counseling Office, Hosei University

Keywords 異文化間コミュニケーション, メンタライジング, 異文化適応, ストレス反応
intercultural communication, mentalizing, cultural adaptation, stress response

ABSTRACT

日本の外国人在住者は近年急激に増加し、総務省は施策として多文化共生社会の推進を進めているが、実際の取り組み内容は異文化適応の二側面のうち、外国人を受け入れるホスト側の日本社会・文化の情報情報やスキルの伝授に留まる「社会文化的適応」の側面に偏り、滞在年数や日本語能力の高さが「臨床心理的適応」の促進に繋がらない現状がある。

本研究ノートでは、新しい文化に出会うゲストと、迎え入れるホスト側の間での異文化適応支援で生じている困難を、メンタライジングの概念を用いることで検討した。異文化適応をミクロの異文化間コミュニケーションで捉え、異文化間コミュニケーションではゲストとホスト双方に文化的ストレスによる反応として非メンタライジングの状態が生じる可能性について考察した。

With the sudden increase of the population of foreign nationals in Japan, the Ministry of Internal Affairs and Communication is trying to facilitate the policy of a multicultural society; however, actual content of the support places disproportional emphasis on “socio-cultural adaptation” of intercultural adaptation, and neither foreign national’s duration of visiting nor high capacity of Japanese language leads the facilitation of “clinical psychological adaptation”.

This paper aims to apply and discuss the concept of mentalizing to the difficulties in intercultural adaptation support between the foreign guests who encounter the new culture and the hosts who are accepting guests. Considering intercultural adaptation as an interpersonal communication from a microscopic point of view, the possibility of the activation of non-mentalizing modes as a response to the cultural stress in both guests and hosts in intercultural communication is discussed.

1. はじめに

1.1 日本に在住する外国人

日本の外国人在住者数は、2017年の「外国人技能実習制度」に続く一連の施策に伴い増加の一途をたどり、2018年6月末時点で過去最高の約264万人(総務省, 2019)となった。国際連合の「一次年以上にわたる住居国の変更」という定義による日本への「移民」の年間増加数は2015年度には世界第4位となり、外国人在住者のルーツも従来多かった中国・韓国・ブラジルに加え、東南アジア・南アジア諸国をはじめ多様化している。「技能実習」と「留学」の在留資格増加が目立つ中、2018年5月の留学生数は29万8,980人でうちアジア地域出身者が93.4%をしめ、大学への留学生は学部生8万4,857人、大学院生5万184人に及ぶ(独立法人日本学生支援機構, 2019)。

こうした外国人在住者の急速な増加は、2055年問題に表されるように急速な少子超高齢化社会への進展と労働人口の減少、世界経済のグローバル化による競争力低下があいまった日本経済の低迷により、経済的・社会的理由から外国人労働者に頼らざるを得なくなった側面も大きい。しかし、近年の世界情勢としてカナダを除いたドイツやフランスをはじめ多くの諸外国が労働力としての移民受け入れ政策を一度は取りながらも、主に教育問題の未解決などから移民の社会統合が困難な課題と化し移民政策を失敗として取り下げた背景(庵, 2016)と、移民政策にホストである受け入れ国の文化・言語の教育とともにゲストである移民の母語・母文化保持支援を掲げたカナダ(栗田・鈴木, 2018)が、社会統合に成功し移民政策を継続して押し進めていることから、外国人在住者の適応支援には日本への社会的、文化的、言語的適応を一方的に支援する視点だけでは十分でない

と言えよう。

1.2 多文化共生社会への支援理念と実際

総務省は多文化共生社会の実現を推進しているが、民間を含む一部の団体では外国人在住者の母語や母文化を尊重し保持する支援がなされてはいるものの(栗田・鈴木, 2016, 2018)、現状での国や地方自治体、教育機関による実際の取り組みは、情報発信の多言語化や日本語教育が中心である(総務省, 2019)。こうした施策には、ホスト側の既存の社会・経済システムを維持し、一方的に「外国人」に日本社会への適応を促す「多文化主義」であるとの批判も多く(関口・中島, 2010)、ともすればホスト側の外国人へのステレオタイプや偏見を強める可能性もある。

現状の支援形態をとる背景には、受け入れ側が異文化適応の二側面である「臨床心理的適応」と「社会文化的適応」(Ward & Kennedy, 1999)のうち後者に重きを置き、新しく来日した外国人の適応困難は日本への社会的、文化的知識や常識の無知と日本語能力の低さによるとする思想が伺われる。しかし複数の調査研究から、外国人在住者の滞在年数は日本語能力向上とは関わるもののソーシャルスキル獲得や異文化適応とは直接の関連を持たず、むしろ日本語能力が高いほどトラブルが多く日本への否定的態度が強くなることが示されている(大橋, 2008)。大西(2016)は、留学生支援の場において留学生とホスト側の支援者間には、同文化同士とは違って可視的な類似性・共通性が生じにくいからこそ、支援を通じた差異の影響の無意味化や肯定的捉え直しのプロセスによる共通性発見のプロセスが重要であることと、それが生じない場合には留学生から相談相手とみなされにくいことを指摘している。大橋(2008)の行った留学生への調査において滞在年数が長くなるほ

ど日本人との「思考様式」、「価値観」、「態度」の相違が要因となりストレスが高くなっていることから、大西が提唱する共通性発見のプロセスは容易ではなく、プロセスからの逸脱が生じるとホスト側だけでなくゲスト側にもホスト側の「一般的日本人像」、すなわちステレオタイプが強まるのが伺われる。

1.3 ステレオタイプとメンタライジング

ステレオタイプとは、ある部類や類型の人々に対するスキーマであるが、「今ここで」を越えて作り出される心理的距離が大きいほど、抽象的で一般化された思考が引き出されるという特徴を持つ (Trope & Liberman, 2010)。また社会心理学的視点からは、ステレオタイプや偏見から差別が生まれるとされている (加賀美, 2012)。上述した現状での異文化接触場面では、ゲスト側ホスト側双方のステレオタイプな「日本人像」、「外国人像」が形成・活性化されることで、異文化適応と支援の困難が生じていると言えよう。

近年精神医学や心理臨床領域において、「心で心进行うこと」であるメンタライゼーション (Mentalization) という概念の研究が重ねられ、愛着障害や境界例をはじめとした人格障害、発達障害を持つ子どもの保護者教育など様々な分野で適用されている。メンタライゼーションの分詞 (動名詞) であるメンタライジング (Mentalizing) は、「今ここで」の自他の精神世界に注意を向けることであり、対人的な問題解決を助け (Allen, 2006; Fonagy, 2006) 新しい環境への学び (Gergely & Csibra, 2005) を可能にするが、ストレス反応により阻害される特徴を持つ。類似概念として異文化とマインドリーディングや認知処理についての研究はあるものの、メンタライジングと異文化要因に関する研究は多くはない (Zapata & Ivan, 2016)。

外国人在住者の日本への「異文化適応」を、ゲストとホストの異文化間コミュニケーションにおいて生じているよりミクロな事象として捉え共通性発見のプロセスを含む「今ここで」により近い相互作用的コミュニケーションを実現すること

に、メンタライジングの概念は大きく関わると思われる。

本研究ノートでは、新しい文化に出会うゲストと、迎え入れるマジョリティ文化のホスト側の間でのコミュニケーション事象に対しメンタライズ機能の視点から検討することで、異文化適応支援への示唆を得ることを目的とする。

2. メンタライジング

2.1 メンタライゼーションとメンタライジングとは

メンタライゼーションは、Fonagy らが発達精神病理学を根拠に精神分析と愛着理論を統合する際に現在の意味で用いられた概念である (Fonagy, Gergely, & Jurist, 2002)。メンタライジングは、言語を含めた自分と他者の行動を、信念や、願望、夢、野心、幻覚といった内的な精神状態に基づくものとして解釈することである。それは認知過程と感情過程の両プロセスにおよび、程よい知的好奇心に基づいた現実的で「地に足のついた想像 (grounded imagination)」であり、他の人の心の中で起きていることは決してわからないという「自他の区別」への気づきを前提とする (Fonagy, 2006; Allen, 2013) 力動的なスキルであり (Fonagy & Target, 1997)、従来のあらゆる精神療法的治療の最も根本的な共通因子であり、相互作用的に行われ、個人がその発達過程において獲得し通常備わっていてしかるべき人間の基本能力 (Allen, Fonagy, & Bateman, 2008) である。

メンタライジングは明示的・黙示的両側面を持ち自他共に対象となり程よく機能している際には現在の「今ここで」の精神状態に関連してなされる。メンタライジングには、それが生じる過程で Allen (2006) が指摘したように、十分現実に根ざしたものとして想像が機能する必要がある、そのためにはターゲット状況における自己のみならず、他者および文脈に関する適度な現実的情報や知識もまた必要になる。

2.2 メンタライジング機能の対人コミュニケーションでの役割

メンタライジングは、人が他者の精神状態への気づきを得ることで効果的な相互作用を可能にさせ、自己の情緒や認知過程への気づきにより情緒調整の能力を促進する、対人的な問題の解決にとって本質的な、人間社会の中心に位置するものである (Allen, 2006)。メンタライズ機能は目的のために行為に着手する能力を強化し、人の行動を解釈する志向姿勢と能力をもたらし、意識の実行機能のうち特に反応の柔軟性の増大をもたらす (Fonagy, 2006)。また、他者から影響を受ける能力と関わり、関係性から学ぶことを可能にしている (Allen, 2006)。

言いかえれば、メンタライズの不全が生じた場面では、Fonagy ら (1995) がメンタライジング以前の体験様式と呼ぶ状態が生じ、対人的な問題は効果的に解決されず対人葛藤が高まり、葛藤による苦痛から、情動調整の機能不全が起こり、情緒的苦痛や葛藤のエスカレーション (Allen, 2013) が生じることとなる。

2.3 メンタライジングの不全

メンタライジング機能の不全には、自閉症の中核欠損の一つであるマインドブラインドネス (Baron-Cohen, 1995) を特徴として持つ自閉症スペクトラム障害を代表とする欠損または未発達による永続的な不全と、一時的また局所的にメンタライズの失敗や破綻が生じている場合 (Fonagy, 2006) がある。Sharp (2006) はメンタライジング不全の背景要因を自閉症スペクトラム障害に代表される非メンタライジングと、認知的情報面に問題はないが共感性において機能不全がある行動障害に代表される歪んだメンタライジングに二分した。また Allen (2006) が力動的マインドブラインドネスと呼ぶ後者は、愛着トラウマや喪失、喪失の予期不安 (Allen, 2013) などを代表とする強い情緒的負荷とストレス反応、またうつ病など精神病理などが一時的または局所的な破綻や失敗が生じさせるが、これは自我防衛としてのメンタライジングの失敗であり、エピソード特有性、内

的葛藤に起因したコンテキスト反応の優勢、生育歴上のトラウマに基づかないことなどの特徴を持つ (Brown, 2008)。

一時的、局所的なメンタライジングの機能不全は、自己と他者の内的世界に注意を向けることの失敗と、自己と他者の内的世界に対して想像性を働かせはするが、現実根ざした想像にとどまれるバランスの失敗から生じる。前者では注意のエフォート・コントロールの失敗により、我々が発達初期に持っている他者の精神状態を自分の視点をそのまま他者も共有するものだと見なす自己中心性 (egocentrism) が表に現れ、ステレオタイプの他者、状況、そして自己への見方を抑制できなくなるという認知的な実行機能の失敗として現れる一方 (Allen, 2008)、後者では歪んだ、または不適切なメンタライジングの現象として現れる。

こうした非メンタライジング的体験モードは、心的等価モード、ふりをするモード、目的論的モードの三体験様式に区分される (Fonagy, 1995; Fonagy et al., 2002; Allen, 2013)。心的等価モードでは内と外、空想と現実、象徴と象徴されるものの境界が崩壊しており、ここで思うことがイコール世界として経験される体験様式であり、ふりをするモードは知性化に代表される現実とのつながりを失って想像の世界にいる状態で、目的論的モードでは心理状態は体験し表出する代わりにすぐに行為につながり、省察や情動への気づきは省かれ、ともすれば問題行動に結びつくこともある。

3. メンタライジングと異文化間コミュニケーション

3.1 ニューカマー受け入れ実践事例とメンタライジング不全

児島 (2002) は日本の公立学校での外国人子女受け入れの実践事例を、教師のとる戦略の側面から検討した。児島は教師の多くが受け入れ時には生徒を外国人として特別の考慮をせず他の生徒と同様に接し、学力の違いや学校への適応度を全て個人の努力に起因する「個人差」としてプロセスし「指導」をする「差異の一元化」が生じる一方、

生徒の不適応や逸脱行為が増えると「文化の違い」という概念を持ち出すことにより「他者化」し、生徒としてではなく外国人として扱う「差異の固定化」が生じることを指摘し、生徒の日本の学校や社会への適応困難には、教師の対応に見出される「自文化中心主義」と、構造上の不平等の結果を生徒個人の問題として扱う傾向が寄与していると批判している。

児島の実践事例で生じた教師の反応をメンタライジングの視点から検討すると、日本人教師と外国人子女の間に生じた異文化間コミュニケーションにおいて、教師に非メンタライジング体験モードが生じたと考えられる。受け入れ当初、生徒の文化移動経験による反応や言語能力による負荷などを考慮せずに接する際には非メンタライズ状態となっており、状況への表面的な行為上の解決にのみ特化した目的論的モードが優勢であり、生徒の不適応や逸脱行為の増加に直面した際には、目の前の生徒と自分の個別の体験ではなく、「外国人」一般論やステレオタイプの見方に偏るふりをするモードが生じていると考えられる

3.2 異文化要因とメンタライジング

人が異文化環境におかれた際の研究には、その個人が新しい異文化環境にどう自分を合わせていくのかという異文化適応の視点と、カルチャーショックの2視点がある。異文化に触れることは当初は社会的交流での慣れ親しんだサインやシンボルの喪失による「不安」(Oberg, 1960)と定義されたが、Alder (1975) が新しい文化の学習と個人の人間の成長のための学習経験のプロセスとして捉え、さらに Berry (1992) が不適応とは切り離し、文化的ストレスとして捉えることを提唱している。留学生を例にすれば、留学体験そのものがストレス要因となることが明らかにされてきた。大西 (2016) は諸外国の例をあげながら、特にアジア圏からの留学生のストレス反応の高さと、大学組織内でのネットワークを流動的に活用するサポートの重要性を指摘している。

特定の文化経験がマインドリーディング能力と関わることは明らかとなっている (Astington,

1993) が、Paladino らは欧州人への実験から、人は異なった文化に属する相手より類似した文化に属する相手の方が共感や罪悪感など二次的な感情を含むより複雑な感情を体験しているとみなす傾向があることを示した (Paladino, Leynes, Rodriguez, Gaunt, & Demoulin, 2002)。メンタライジングの文脈からこの傾向を理解すると、文化の差異による感情の背景にあるコンテクストの情報不足の影響も寄与しているであろうことを考慮してもなお、人は異文化に属する相手に対して対象の感情過程へのメンタライズが無自覚に限定的または歪む可能性が高いことを示唆しているといえよう。

異文化間コミュニケーションで困難が生じている状況では、外国人在住者と受け入れ側の日本人それぞれに、言語や文化的背景の相違や無知に由来する認知的ディスコミュニケーションだけでなく、異文化状況そのものの「異質な相手である異国人」への構えとしてのメンタライジングの不全によるステレオタイプの反応と、ディスコミュニケーションが契機となり「やっぱり同じではない」とメンタライジングの不全が生じることによるステレオタイプに頼る反応の両方が複層的に生じているのではなかろうか。

近年の異文化間教育において異文化間能力として「よくわからないことに対しても寛容になり、関心を示す」「好奇心を示し、知ろうとする」「他者の世界観の理解」「文化に対する自己認識と自己評価能力」といった具体的内容 (大木, 2019) が挙げられていることから、異文化間コミュニケーションにおいてメンタライジングの視点を持ちその知見を生かす可能性が大きいように思われる。

4. 考察

文化的ストレスのかかる異文化コミュニケーションでは、ホストとゲストの社会的文化的知識伝達や言語の疎通性だけでは、社会的適応は促進できても心理的な適応は進まず、外国人在住者のホスト社会から感じる疎外感や孤立感は軽減されない。異文化間コミュニケーション場面において

は、一時的に機能不全や破綻が生じているメンタライジング能力の回復と、メンタライジングを現実に即したものにするための知識や情報の両方の側面から支援することが有用であると言えるだろう。そのためにも、日本の外国人在住者の異文化コミュニケーション場面でのメンタライズの実態調査や、学際的な知見の応用が望まれるだろう。

引用文献

- Alder, P.S. (1975). The transitional experience: An alternative view of cultural shock. *In Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23.
- Allen, J.G. (2006). Mentalization in practice. In J.G. Allen, & P. Fonagy (Eds.), *Handbook of Mentalization-based Treatment*. (pp. 3-30). West Sussex, John Wiley & Sons.
- Allen, J.G., Fonagy, P., & Bateman, W. (2008). *Mentalizing in Clinical Practice*. Arlington, VA: American Psychiatric Publishing, Inc.
- Allen, J.G. (2013). *Restoring Mentalizing in Attachment Relationships: Treating Trauma with Plain Old Therapy*. Arlington, VA: American Psychiatric Publishing.
- Astington, J.W. (1993). *The child's discovery of the mind*. Cambridge: Harvard University Press.
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. Cambridge: MIT Press.
- Berry, J.W. (1992). Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 60-85.
- Brown, W.G. (2008). Failure to mentalize: Defect or Defense? *Psychoanalytic Social Work*, 15(1), 28-42.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2019). 平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果. 日本学生相談支援機構. (2019 年 1 月) <https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html> (2019 年 8 月 2 日)
- Fonagy, P. (1995). Playing with reality: the development of psychic reality and its malfunction in borderline personalities. *International Journal of Psychoanalysis*, 72, 39-44.
- Fonagy, P. (2001). *Attachment Theory and Psychoanalysis*. New York: Other Press.
- Fonagy, P. (2006). The Mentalization-focused approach to social development. In J.G., Allen, & P. Fonagy (Eds.), *Handbook of Mentalization-based Treatment*. West Sussex: John Wiley & Sons.
- Fonagy, P., Gergely, G., & Jurist, E.L. (2002). *Affect Regulation, Mentalization, and the Development of the Self*. New York: Other Press.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- Gergely, G., & Csibra, G. (2005). The social construction of the cultural mind: imitative learning as a mechanism of human pedagogy. *Interaction Studies*, 6, 463-481.
- 庵功雄 (2016). やさしい日本語—多文化共生社会へ 岩波新書
- 加賀美常美代 (2012). グローバル社会における多様性と偏見. *異文化教育*, 36, 12-36.
- 児島明 (2002). 差異をめぐる教師のストラテジーと学校文化—ニューカマー受け入れ校の事例から. *異文化間教育*, 16, 106-120.
- 栗田七重・鈴木庸子 (2016). "International Mothers Chatting Party" の実践—外国人家庭・国際結婚家庭の母語と子育ての支援として—. *教育研究*, 58, 137-141
- 栗田七重・鈴木庸子 (2018). 外国人家庭・国際結婚家庭の子育てにおける母語の保持—国内外の事例を中心に—. *教育研究*, 60, 103-110.
- Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment in new cultural environment. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.
- 大橋敏子 (2008). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 京都大学学術出版会
- 大木充 (2019). 異文化間教育とグローバル教育 西山教行・大木充 (編) グローバル化のなかの異文化間教育—異文化間能力の考察と文脈化の試み 明石書店
- 大西晶子 (2016). キャンパスの国際化と留学生相談 多様性に対応した学生支援サービスの構築 東京大学出版会.
- Paladino, P.M., Leynes, J-P., Rodriguez, A.P., Gaunt, R., & Demoulin, S. (2002). Differential association of uniquely and nonuniquely human emotions to the ingroup and the outgroups. *Group Processes and Intergroup Relations*, 5, 105-117.
- 関口知子・中島葉子 (2010). 越境時代の多文化教育 五島敦子・関口知子 (編) 未来をつくる教育ESD—持続可能な多文化社会をめざして 明石書店
- Sharp, C. (2006). Mentalizing Problems in Childhood Disorders. In J.G. Allen, & P. Fonagy (Eds.), *Handbook of Mentalization-based Treatment* (pp. 101-122). West Sussex: John Wiley & Sons.
- 総務省 (2019). 多文化共生の推進に関する研究会報告書. 2019 年 3 月 31 日 <http://www.soumu.go.jp/main_content/000608108.pdf> (2019 年 6 月 8 日)
- Trope, Y., & Liberman, N. (2010). Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review*, 117(2), 440-463.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999). The measurement of socialcultural adaptation. *International Journal of*

Intercultural Relations, 23, 659-677.

Zapata, P., & Ivan, D. (2016). *Cultural influences in the theory of mind* (Master's thesis). Retrieved from The University of Queensland, UQ eSpace. 2016 年 1 月 15 日 <https://espace.library.uq.edu.au/data/UQ_376677/s4301103_mphil_submission.pdf?Expires=1566642617&Key-Pair-Id=APKAJKNB4MJB4JNC6NLQ&Signature=GOuCkv7mGW9HRXS4aKT6P4xHhwmjpnw461iqW8ynbX0b7u-esH3WuV2rGjWLV8tzBVFDTGg6rMmIs7uirNiCJ6G-yLK-B-RNEI2d8UH6IAXSjCjxNK1H~zShaQvEhAomnP6sRWPWn9h4FTmrUntNNCRSQQyY5un7mUzxf28aDVBYkhtN1HkcoIMVBi1~DpfQqy2IZKoo9DW4dp1WLGk2nxR6sC9V1-4bb5Kkf1YOLRwbrEMIN6SUO-i3UguFYpnVoYpNtXJiKGLFn-Jul5ouFmeKEQoP1tkabQGRKNEd-bw8tZscQF08rFKbja93GWVmR46adZdvaznuwQwDUdYQ__> (2019 年 7 月 30 日)